

開催地名	静岡県下田市
開催日時	令和5年10月20日（金） 14：00 ～ 15：30
開催場所	下田市役所 大会議室
語り部	菊池 満夫 （岩手県陸前高田市）
参加者	下田氏職員 20 名
開催経緯	下田市では、南海トラフ地震等が発生したときに大規模な津波被害が想定されている。また、大規模災害を経験している職員も少なく災害対策本部の運営や、災害対応についてイメージがわからない現状がある。実災害での対応力を強化し、各部署の職員が自分事として捉えられるよう講演の開催を希望した。
内容	（１）東日本大震災での陸前高田市の被災状況 東日本大震災発災時は、陸前高田市役所の企画部長を務めていた。地震発生時点では、5メートル以下の津波であろうと予想していたが、実際は15メートルを超える津波が押し寄せた。地震後気象庁から6メートル以上の警報アナウンスが発令されていたが、地震の影響で停電し情報が得られず対応が遅れた。そして地震発生後、すぐに津波が来るのではなく、30分ほどしてから押し寄せたため、心に油断が生じ、避難が間に合わなかった人々が多くいた。陸前高田市役所の3階屋上ギリギリまで浸水した。3階建て以下の建物はほとんど浸水し流されており、市街地は海岸から直線1.5キロメートルまで津波が押し寄せた。その後も無線も携帯電話もつながらない状態で夜を明かした。具体的な被害内容としては、市の正規職員295人のうち68人（約23%）が死亡・行方不明、臨時職員等を含めると111人が死亡・行方不明となった。市民全体としては、人口約24,000人中1,700人程の方が亡くなった。 （２）避難所等の運営状況 避難所は最大で92か所、避難者数は最大で10,143人にまで及んだ。特に苦労したことは、トイレだ。土を掘って、仮設のトイレを設置した。その他にも在宅避難者の把握が困難であった。避難所と並行して安否確認所の設置を行い、約24,000人以上の市民の生存確認と避難場所の確認を行った。市民名簿は地方紙の新聞にも全て公開され、情報をかき集めたが、全て確認するのに約半年間も要した。また、閉校した学校の体育館や近隣の住田町に遺体安置所の設置も行い、遺体確認のための巡回バスも運行した。仮設住宅が次第に完成してきた後も避難所からの退去がなかなか進まない問題もあった。理由としては、避難所では生活費がかからないため、衣食住の生活費を自己負担しなければならない仮設住宅に移転しない避難者も少数ではあるがあった。 （３）災害対策本部について 関係機関との連絡調整会議は、本来であれば市役所が設置するものであるが、市役所も被災したため、震災直後は災害状況の把握や資料作成ができず、多くのことを自衛隊等に協力いただいた。職員も4分の1程が亡くなり、震災後、避難所に従事した職員が多く、本部で復旧、復興のために従事する職員が不足したため呼び戻しに苦労した。職員の人数が足らず、毎日、土日も関係なく朝7時半から、20時まで働き続けた。岩手県や他の地域から職員を派遣してもらい、支援金手続き等の手助けも多くいただいたが、3月ということもあり、決算から選挙運営、市民の方の確定申告や学校の卒業式・入試

試験・入学式など細かい業務を多くあり、人手は全く足りず、日夜働いていた。そういった忙しい日々の中で数週間、職員は狭い部屋で雑魚寝し、特に男性職員は3月の寒期中、調理場のコンクリートの上で寝泊まりしていた。震災後、落ち着き始めた後も、人員の確保については、苦勞した。顕著だったのは、地元の方よりも他県の方からの職員として就職希望の応募が多く来た。理由としては、被災地に貢献したいと応募する人達が多かった。地元の方は災害後で、自分や周りの家族のことで精一杯な人が多いため、応募は少なかった。

(4) 東日本大震災から得られた教訓と反省そして復興

応援職員は1、2ヶ月だけの派遣ではなく、1、2年の長期派遣の要請をしたが、叶えられるのは、難しかった。そんな中で、名古屋市だけは全面的に職員を年単位で派遣してくれて、とても助かった。その繋がりもあり、今でも良い関係を築いている。その他には、とにかく報道陣の取材が多く大変であった。大手は誘導する取材など態度が悪いところもあり、マスコミ取材への対策は必要であると感じた。ボランティアに来ていただく方も大変ありがたいが、自己完結型のボランティアでないと、こちら側が寝泊まりする場所等の対応に追われ、悩ましいこともあった。そして復興が進んでいった後も伝統芸能、行事の継承・継続が難しく衰退していることはとても悔やまれることである。

最後に、震災や緊急な事態が発生した際に大切なことは、「臨機応変な対応」と「繋がり大切にすること」である。マニュアルを作成することは大切だが、実際にマニュアル通りには行かないことがほとんどであるため、臨機応変に柔軟に、対応することがとても大切である。そして、来るものは拒まず、受け入れることにより、様々な方や地域とつながりができ、復興後も手助けしていただい方々と付き合いが残り、それが後々の宝になる。自分としては語り部等で全国に恩を返していければと思っている。



開催地より

当時の陸前高田市では、市庁舎が津波により浸水したことや職員数が295人と、現在の下田市と似た境遇にあることから、自分たちの状況に置き換えて講演を受講することができた。中でも、震災直後の災害対策本部の立ち上げ時に職員数が足りない、本部の設置場所を探すところからスタートするなど、平常時からでは想定できない状況にも対応しながら支援要請や復旧活動を行っていた箇所が強く印象に残った。下田市でも災害対策本部運営訓練などを行う機会があるため、本番の想定外の状況に一つでも多く対応できるよう、流れの確認や意識向上に努めていきたいと思う。